

## 有志共立という思想

### I. 東京慈恵会医科大学創立の思想

#### ま え が き

東京慈恵会医科大学附属病院（慈恵医大病院と略）の前身は有志共立東京病院である。その名が示す通り同じ志をもった者が力を合わせてつくった病院であった。その中心人物であった高木兼寛は、この病院の他に成医会文庫（図書館）、成医会講習所（医学校）、看護婦教育所（看護学校）などを次々とつくっていったが、そのいずれもがこの有志共立東京病院と同じく、志を同じくする者同士が相寄り、力を出し合ってつくったものであった。いうならば今日の慈恵医大を構成しているこれらすべては、つくられた時期も、参加した人々もそれぞれ異なるが、その中心となる思想は同じく有志共立という思想であった。

そしてこれらに参加した有志はいずれも当代一流の人物であり、皇族、華族をはじめ、著名な医学者、財界人、政治家（および彼らの夫人）らであった。明治期につくられた私立、公立医学校が経済的破綻のため次々と廃校になっていく中で、わが慈恵医大のみが生き残り、大きく発展したのは、このような好意的な有志の方々の優れた采配があったからであった。

ある私立の医学教育機関の運営が、このような医療を受ける側の人々によって支えられていたということはきわめて興味深いことである。慈恵医大のこのような有志共立的・開放的性格は、国民の医療の在り方から考えて理想的なものであった。

本小論では、この慈恵医大創立の思想、つまり有志共立という思想につい

て、いくつかの具体例とこの思想の起源とその系譜について考察してみたい。

## 成 医 会

高木兼寛は薩摩藩医として戊辰戦争に参加したが、自分の医学的力のないことを実感したため、戦争が終わるや鹿児島島の医学校に入学し、そこで英医 Willis から熱心に西洋医学を学んだ。次いで海軍に入ったが、そこでも多くの脚気患者を診るにつけ再び自分の医学的無力をさと、遂に英国セント・トーマス病院医学校に留学し、5年間そこで十分英国（の実学的）医学を学んだ。

兼寛は、日本の医学、医療の改善に夢をいだきながら帰国した（1880）。そして彼はただちに夢の実現にむかって行動し始めた。しばらくここで彼が帰国した当時の日本の医療状況を簡単に眺めておきたい。

### 明治初期の医療状況

兼寛が留学中に強く感じたのは日本の経済的貧しさであった。粗末なものを食べ、汚い環境で生活し、しょっちゅう病気にかかり、若くして死んでいく日本人のことであった。平均寿命をみても、1880年代のそれは男女とも32-3歳に過ぎなかった。日本人の寿命をこんなに短くしたのは、子供の死亡が多かったことと、急性慢性伝染病で死んでいく者が多かったためであった。1886年のコレラによる死亡者数をみても108,400人もあり、日露戦争の全戦傷病死者85,600人と較べてもいかに多かったかが分かるのである。

このような医療状況の悪さは何も地方に限ったことではなく首都東京でも同じことであった。詳しく説明する余裕はないが、当時の新聞のコラム欄にこんな記事がある。「或る人曰く、東京は健康に適せざる土地なり。芝に住めば肺病にかかり、有楽町に住めばおこり（マラリアに似た病気）にかかり、築地に住めば腸チフスにかかり、神田に住めば脚気にかかり、麴町、四谷、牛込に住めば心臓病にかかり、本所、深川に住めばコレラにかかると」。

このような状況に対する医療者側の態勢といえ、これまたお粗末なもので、医師（洋医のみ）の密度をみても現在の十分の一以下に過ぎず、患者に対

する医師の絶対数がとにかく少なすぎたのである。しかも、1880年代から開業医の黄金時代が始まるといわれ、数少ない医者にはかえって勉強をせず、金儲けにはしり、成り上がり者風になっていった。貧しい庶民にとっては医者はますます遠い存在になっていったのである。このことを当時の長尾折三はこのようにのべている。「医師という職業は利益を追う職務なりや。……営業税下に立たざる神聖なる職業にあらずや。……医を以て普通一般の商売観をなし、暴利貪欲飽くことを知らざるもの、抑も何の心ぞや」。

当時の川柳にもこんなものがある。「薬礼の多寡迄はかる検温器」。

診療の粗雑さについても長尾は書いている。「特等室、一等室、二等室と等位の下るにしたがって、院長殿の態度も横柄になる。順番を待つ二等室新患(者)に、院長はいかにも無造作な診察振りで『右の肺が少しばかり悪いが大したことはない』。このとき件の患者は怪訝な顔。それもその筈、昨日副院長の診断では左肺が悪いと宣告されていた。一随行医員密かに耳語して曰く『これが右と左の追分診断というのだらう』」。

こんな状況のなかで官立(国立)の大学病院(当時は東大病院しかなかった)といえ、国民・庶民のためにつくられた病院であった筈なのに、そこに働く医師の特権意識が強すぎたため、庶民からはかえって遠い存在であった。同じ長尾折三はこのように書いている。「大学病院の先生に診て貰いたい患者といえ、非常に数で、同院がかたく決めた一日二十人の定員の許可札を得んがために、毎日犇(ひし)めくありさまは驚くばかりである。……受け付け番号を受け取って、さて大先生の御出勤をお待ちするわけだが、その出勤というのがたいい十時過ぎ。しかも御所労でお休みになるかも知れず、心細いかぎりである」。今日の東京都の人口よりはずっと少なかったとはいえ(当時の人口は100万といわれる)、1日20人限りの診察では無いに等しかったのではないだろうか。そもそも大学病院の初代ドイツ人教師 Mueller は患者の都合よりも自分の都合で患者を選択し、患者が頼んでも「自分の研究対象ではない」とか「研究時間が来たから」とか云って診ないこともあったといわれる(いわゆる研究至上主義だったのである)。

要するに当時の医療状況は、国全体が貧しく、衛生施設も粗末で、伝染病

その他で死んでいく者が多く、しかもこれに応えるべき医師の数が少なく、医師自身もまた医療技術を磨こうとせず、権威と金儲けのために走り回っているという状態であった。そして政府は政府で富国強兵に忙しく、医師の養成どころではなかったのである。

## 成医会の結成

高木兼寛は英国での長い留学生活を終えてこのような状況に帰ってきたのである(1880)。彼は海軍病院長に就任し、海軍の医療問題(とくに脚気の問題)に力を注ぐと同時に、この日本全土にはびこる病人を疎外している状況を何とか解決せねばならないと考えた。しかし問題があまりにも大きく、何処から手をつけるべきか見当もつかなかった。

そんな時、福沢諭吉の高弟・松山棟庵が兼寛を訪ねてきた。松山は京都新宮塾で蘭方医学を学び、さらに江戸鉄砲洲の福沢塾(慶応義塾の前身)で英語を学んだ英国派医師であった。松山と兼寛は、日本に広がっている人間疎外の医療(病人の困窮と医者の墮落)を何とかして人間味のあるものに改革すべきではないか、それを具体化するにはどうしたらよいか、について熱心に話し合った。

松山は当時一つの挫折を経験していた。福沢諭吉と図って1873年にはじめた医学校・慶応義塾医学所が経済的失敗のため僅か7年で廃校になってしまったのである。この失敗は松山にとっては苦々しい経験であったが、兼寛にとってはむしろ貴重な研究材料であった。

彼らはまず日本全国から同じような思想をもつ同士をあつめ、民間医学研究団体「成医会」を結成した(1881年1月)。そしてこの成医会を中心に必要な医療事業を計画していくことにした。結成当時の会員は、高木兼寛(会長)のほか、松山棟庵、隈川宗悦、田代基徳、新宮涼園、安藤正胤、松山誠二、上田藤太、杉田 武(以上、慶応義塾医学所関係者)、戸塚文海、豊住秀堅、鈴木重道、木村壮介(以上海軍軍医)ら36名であった。この会の英語名 Society for the Advancement of Medical Science in Japan からみて、彼らはこの会を日本を代表する医学研究団体にする心算であつたらしいことが分かる。

彼らは日本の医療の現状を分析し、成医会の基本的目的を一先ず「専ら医風を改良し、學術を講究すること」にあるとした。この二つの目的「医風の改良」と「學術の講究」については、今までその意味内容についてあまり吟味されたことがないので、ここに当時の資料を提示して、彼らの意図を少し考察してみたい。

### 成医会の目的——医風の改善

成医会初期（1881年（明治14年）11月）の討論会において、成医会会員・松山誠二（松山棟庵の甥）は「医風改良案」なる論題で、当時の日本全体にはびこる医師の悪風を提示し、これを改善する方法について論じている。すこし長いが、上の成医会の目的と関係が深いので成医会月報（第一号記録）から引用する（現代語に改変）。

#### 「医師ノ悪風 I. 品行上ノ悪風

1. 医師ハ互イニ助ケ合ウノガ本来デアルノニ、助ケ合ウドコロカ、カエツテ誹謗シアイ、巧ミニ他医ノ欠点ヲ暴イテ、己ノ失敗ヲ隠スガ如キ（医道ヲ汚ス）行為。
2. 医師ノ使命ヲ忘レ、診断不能ノ患者ニタイシテ如何ニモ分カッテイルヨウナ態度ヲトリ、他医ニ相談スルコトヲセズ、マタ患家デ他医ニ遭遇スルトキハ、コトサラ尊大ナ態度ヲトリ、甚ダシイトキハ相手ヲ面辱スルニイタル。
3. 診療ニサイシテ商人ノヨウナ根性ヲイダキ、病氣ヲ診察スルヨリハ患家ノゴ機嫌ヲトルコトニ汲々トシ、遂ニたいこもちノヨウニ看ラレ、コレニ甘ンジルニイタル、マタ金欲ニカラレテ特定ノ人ノタメニ毒藥ヲ投ジタリ、墮胎藥ヲ作ツタリ、甚ダシイトキニハ詐欺、情事ナドニモ加ワルコトニナル。

#### II. 業務上ノ悪風

1. 病ノ本体ヲ詳シク診断シ、静カニ治療法ヲ考エルノガ医師ノ本分デアルノニ、診察ハタダ外見ヲ飾ルノミデ、必要ナ検査ヲ決シテヤロウトシナイ。

2. 衛生学ノ事項ニ注意スルコトハ医師ノ本務デアルノニ、コレヲシナイタメ伝染病流行ノ際ニシバシバ大キク誤ルコトガアル。
3. 進取ノ気性ニ乏シク、自分ノ経験デ先哲ノ遺漏ヲ補アウトスルデモナク、マタ何カ新シイ研究ヲシテ発表シヨウトスルデモナイ。平素ノ思想トイエバ自分ノ身ノマワリニ限定サレ、決シテ遠大高尚ノ域ニ達シヨウトシナイ」。

さらに松山誠二はこれら悪風に対する改善案を次のようにのべている。

「改善案 I. 開業免状ノ与奪 改善案ノ第一ハ、開業免状(医師免許証)ノ与奪ヲモット厳密正当ニ行ウコトデアル。医学界ノ名誉ヲ保持センガタメニハ、コノコトヲ政府ニ断然請願スベキデアル。政府ハ、一般国民ト同ジク、医師ニモ禁獄懲役罰金等ノ罰ヲ課スコトニナツテイルガ、医学ノ専門領域ニナルト干涉シニクイタメ、ヨホドノ罪科ガナケレバ、ソノ免状ヲ奪エナイノガ現状デアル。マタ開業試験(医師国家試験)ノゴトキハタダ知識ヲ論ズルノミデ、残念ナガラ人物、品行ニオヨブコトガナイ。モシコノ改善案ガ実行サレレバ、医師ニ破廉恥ナ罪科ガアルトキハ、直チニ開業免状ヲ取り上げ、マタ医学生ニ不品行ノ者ガアレバ、直チニ開業試験ノ受検資格ヲ取り上ゲルコトガデキ、総ジテ怪シゲナ人物ガ医療ニタズサフルコトが無クナル筈デアル(免状与奪ノ方法ニツイテハ別論ニ付ス)。

改善案 II. 医師集会 各府県ニ医師会ヲオコシ、医師同士ガ親睦シ、相互ニ切磋琢磨スレバ、上述ノ品行上ノ悪風 1, 2 ハマモナク消滅シ、業務上ノ悪風 1, 2, 3 ハカナリ減少スル筈デアル。……

改善案 III. 調薬補・薬局ノ分離 コレハ品行上ノ悪風 1, 2, 3 ヲ改善スルニヨイ方法ニナロウ。医師同士ガ互イニ敵視シ合イ、患者ノタメノ話し合イヲシナイノハ、自分ノ信用ガ他医ニ取ラレテシマウコトヲ恐レルカラデアル。ツマリコレハ自宅ニ薬局ヲ置イテソコデ調剤ヲシテイルタメデアル。モシ医師ガ調剤ヲ廃止シ、各医師ガ応分ノ診察料ヲ定メルナラバ、品格、品性オノズカラ高尚トナリ、世人カライヨイヨ尊敬ヲ受ケルコトニナロウ。……

改善案 IV. 医学教育 医学教育ヲ盛ニスル目的ノ一ツハ、上記業務上ノ悪風(1, 2, 3)ヲ防グタメニアル。診察・治療ノ周到、衛生ノ注意、進取ノ

気性ナドハ、シツカリシタ医学教育ノナイ者ニハデキナイコトデアル。ココニ云ウ医学ノ教育トハ、イウマデモナク医学校ヤ病院ニオケル知識ノミニ偏ツタ狭イ教育デハナク、広イ教養ヲ身ニツケ、思想ヲ常ニ高尚ノ域ニ到達サセルモノデアル。……」。

松山誠二のこの提案につづいて多くの成医会会員の活発な意見の交換が行われた（これも成医会月報に記録が残っている）。成医会月報の編集長・松山棟庵も、記録の最後に、自分は用事のために出席できなかったが、成医会の一大目的は「医風を改良し学術を講究すること」にあるのだから、他日必ず自分の意見を披露したいと付記している。

### 成医会の目的——学術の講究

成医会の第二の目的「学術の講究」についても簡単に考察してみたい。ここにいう講究とは講義、討論を中心にした研究であり、試験管を振ったり、顕微鏡を覗いたりする今日の意味の研究とは若干違うらしい。

明治という時代は、洋医が少なく、また容易に医師を養成できない状況から出発したわけであるが、さらに困ったことは、この数少ない医者が日進月歩の医学を勉強しないことであつた。成医会で頻繁に勉強会（例会）を開き、きびしく出席をもとめたのも、「学術を講究」して、少しでもこの状況を解消しようとしたためであつた。

最初の成医会例会（1881年1月）は、兼寛会長の腎臓病論の教育講義第一回からはじまった。以後例会は毎週一回、会長、幹事、会員らが代わるがわる講演、治験例、詢議、討論などを行った。場合によっては、患者を同道して診断を検討し合うこともしばしばあつた（1888年からは成医会講習所の生徒の聴講も許した。そして盛会時には日本橋以南の開業医のほとんどが出席したといわれる）。また第三週の例会だけは司会、講演、討論などすべて英語で会が進められた。そして成医会例会の内容は機関誌「成医会月報」に掲載され、国内はもちろん国外にも発送された。

成医会の必要経費はすべて入会金（3円）、会費（月額1円）および有志の寄付金によってまかなわれた（成医会規則には「本会ノ目的ヲ助クル為、金

錢若クハ物品ヲ寄付スル者アレバ之ヲ受納スベシ」とある)。

(余談であるが)1886年ころ、入会金3円、会費月1円は少し高いので、入会金を1円に、月額会費を50銭に下げて、会員をもっと増やしたらどうかという意見が出されたことがあった。その時の兼寛会長の意見は、「医学の進歩を計り、医風を高尚ならしめるためには、当然経費を要する。家屋の購入、文庫の創設・拡充、その他の企画、一つとして経費を伴わないものはない。しかも、この経費は会費、入会金、寄付金にまつ外はないのである。現在の入会金、会費に耐えない者は、即ち本会の目的に協力する資格のない者であるから、あえて費用を低廉にして人の多きを求める必要はない」というき然たるものであった。この会長の意見は有志共立の精神の真髄を示すものとして大変興味深い。

高木兼寛小伝 成医会会長・高木兼寛は1849年、日向国穆佐村に大工(棟梁)の子として生まれた。彼は生涯に多くの仕事を成したが、いずれの場合も、志を同じくする有能な人に参加してもらい、その組織の力で仕事を仕上げていくという仕方であった。彼は7歳頃から(鹿児島に遊学するまでの10年間)父について大工の仕事を手伝ったというから、この間に父棟梁から大工、左官、建具、畳屋、瓦屋ら職人の組み方、仕事全体の進め方などをじっくり学んだに違いない。兼寛の仕事の進め方にはどうも父から学んだものが多いように思われる。



写真1. 高木兼寛(1849-1920)。

またこれぞと思う人物を積極的に取り込んでいくことも兼寛の特技であったように思われる。こんな逸話が残っている。日高 昂(後の東京病院院長、慈恵医専眼科教授)がまだ青年医師であった頃、同県出身の大先輩として兼寛を訪ねたことがあった。兼寛はこの男が

よほど気に入ったらしく、後年高給をとって仙台の病院に勤めていた日高（仙台医学校教員）にこんな手紙を出している。「君は往年東京に出てもよいと云っていたが、今以てその意であるか。じつは自分設立の東京病院において瀬脇ドクトル（院長）が辞職するに付いては、その後任として君を招きたい。給料は今取って居るだけ遣る、また別に手当てがあるならそれも遣る、住居の世話もして遣る」というのである。

（以下簡単に履歴書風にのべる）兼寛は戊辰戦争後一旦鹿児島に帰り、英医 Willis に師事したが、さらに海軍に入り、そこから英国セント・トーマス病院医学校に留学した。5年後帰国し、松山棟庵と成医会を結成して成医会文庫、成医会講習所、有志共立東京病院（施療病院）、同病院看護婦教育所などを矢継ぎ早につくった。これが今日の慈恵医大の土台になった。

この間、海軍病院長としても活躍し、海軍の脚気予防のため兵食を改善（麦飯）し、脚気撲滅に成功した（これがビタミンの発見の糸口となり、国際的に高い評価をうけた）。1885年、海軍軍医総監、1905年、男爵となり、麦飯男爵といわれた。晩年は国民の衛生思想の普及、体位向上のために全力を尽くし、1920年、72歳で逝去した。

## 成 医 会 文 庫

成医会文庫とは成医会が主催した図書館のことであり、現在の慈恵医大図書館の前身である。すでに成医会結成時（1881）の「成医会設立之旨趣」に「文庫ヲ設ケテ和漢洋ノ医籍ヲ蒐集シ、益々博識ニ進ムルノ一途ヲ開カンコトヲ要ス」とあるように、結成当初から文庫（図書館）の設立には強い希望をもっていたらしい。当時の医者（不勉強）を改善するには文庫の設立がもっとも良い方法と信じていたからであろう。

また同旨趣には「諸般ノ医学科ニ属スル所謂ル標本（スペシーメン）ナルモノハ、學術ノ進歩ニ甚ダ緊要ナレバ、コレヲ購入シテ室内ニ陳列シ、以テ会員及ビソノ他学者ノ検閲ニ供セント欲ス」とあり、これによると何か今日の標本館に類するものを設けようとしていた模様である。

文庫創設の具体案は1884年10月の成医会大会に提出され直ちに決議され

た。「右文庫ノ創設ハ我が国ニ於イテ未ダ之レナキ所ニシテ、其ノ事タル極メテ重大ナルヲ以テ、会長並ビニ会員ノ論議モマタ区々ナリシガ、遂ニ之レヲ創設スルノ事ニ決セリ。今其ノ着手ノ方法ハ大略左ノ条項ニ在リ。

- 第一 文庫ヲ設立スルニ恰好ナル土地ヲ得ルコト。
- 第二 該地面大約 400 歩ニシテ市井ニ密接セザルヲ要ス。
- 第三 文庫ハ煉瓦ヲ以テ建築スルコト。
- 第四 我が会ハ文庫内ニオイテ開クベキコト。
- 第五 右設立ノ費用ハ会金ヲ以テシ、其ノ不足ハ有志ノ拠金ヲ乞ウコト。

以上」

この第五の「設立の費用は（成医会）会金をもってし、不足金は有志の拠金に依る」というところに、何とか同志の力を出し合って文庫をつくりたいという有志共立の精神がみなぎっている。

翌 1885 年 1 月には、次の文庫設立医員 7 名が決定された。長与専斎（適塾出身。蘭医 Pompe, Bauduin らに師事、本木昌造に英語を学ぶ。内務省衛生局長）、池田謙斎（適塾出身。ドイツに留学。東大初代医学部長。宮内省侍医局長）、三宅秀（フランスに留学。帰国後 Hepburn に英語、医学を学ぶ。東大医学部長）、高木兼寛（成医会会長）、J.C. Hepburn（米人宣教医師。ペンシルベニア大学医学部卒、ヘボン式ローマ字で有名。成医会名誉会員）、W.N. Whitney（米人宣教医師。東大で医学を修める。Hepburn の弟子。成医会名誉会員）、E.S. Eldridge（米人宣教医師。函館病院、横浜十全病院医師。Hepburn を助ける。成医会副会長）らである。この人たちの人選についてはあとで述べる。

## 成医会文庫の目的

文庫設立委員会はさっそく「文庫設立趣意書」を作成し、関係各方面に配布した。この趣意書には文庫の必要性和その目的を次のようにのべている。

「現在、欧文、和文ヲトワズ、医学書ハホトンド東京ニアリ。トクニ大学（東大）医学部ノ文庫ノ如キハ、専ラドイツ国カラ、アラユル書籍、雑誌ヲトノエ、18,000 余巻ヲ蔵スルトイワレル。シカシ残念ナコトニ、コノ文庫ハワレワレ一般ノ医師、医学生ガ容易ク利用デキル状態ニハナイ。

近年、ワガ国ノ医学モ西欧ノ医学ニナライ益々隆盛ニナツテイルガ、ソノ進歩ヲ知ルニハ、人ニ教エル者モ教エラレル者モ共ニ容易ク利用デキル文庫ガ是非必要デアル。

近年、ワガ国ノ医学校ニオイテハ益々欧語ヲ用イントスル勢イニアリ、トクニ大学(東大)医学部デハ専ラドイツ語ヲモツテ医学生ヲ薰陶シテイル。シカシ今後ハ西欧ノ医学ヲ学バントスル者ハ、ドイツ語ニカギラズ何レカノ外国語ニ精通シテイル必要ガアル。ツマリ今後ハ広ク西欧ノ医書(ドイツ書、フランス書、イタリア書、英書ノ何レカ)ヲ読ミ、コレヲ了解スルコトガ医学生、医師ニトツテ是非必要ニナツテクル……。

成医会文庫ノ目的ヲ要約スレバ次ノ二項ニナル。

第一 医学生オヨビ医師ヲ奨励シテ、博ク西欧ノ医書ヲ講読セシメントス。

第二 現今ノ限定サレタ文庫ノ利益ヲヨリ拡大シ、ワガ国ノ医学ヲ一層高イ地位ニ上ラシメントス。

ワガ文庫ニハ本邦人ノ著書ハモチロン漢方医書ノ如キモコレヲ集蔵シ、カツ医書ニ加エテ医学上ノ博物局(標本室のことか?)ヲモ設置セント欲スルナリ……。

マタワガ文庫ニオイテ購入セル内外書籍オヨビ寄稿セル医家ノ論説ハ英文ヲモツテ成医会月報ニ付載スベシ。

コノ文庫ヲ主宰スルモノハワガ成医会ノ委員ニアリ、故ニ書籍、雑誌ノ類ハ続々コレニ送付セラレヨ」。

この成医会文庫は、東大の文庫のようにドイツ語だけに限定せず、また一部のエリートだけに絞らず、広く内外医書を揃えて、すべての医学生、医師に広く利用できるようにしようとしたところに大きい公共性と先見性があったと思われる。

### 成医会文庫のその後

上記の文庫設立趣意書を関係各方面に配布したところ、これに応じて成医会会員その他から続々と書籍、金銭の寄付が相次ぎ、間もなく 1885 年 2 月には、京橋区新肴町(現・銀座 3 丁目)に煉瓦造りの家屋を手に入れ、同年 4 月

に開館することができた。わが国最初の民間医学図書館であった(これは1887年ころから東京医学図書館とも呼ばれた)。

しかしどういう訳かその20年後(1905)、この文庫は同家屋を売却し、その売却費を資として東京慈恵医院の構内に煉瓦造りの家屋(縦2間、横8間)を建て、そこに成医会文庫の和医書1,480冊、洋医書2,105冊、洋雑誌類866冊を移した。そして東京慈恵医院医学専門学校の管理下に置くことになった(専門学校本来の図書はこの1割ぐらいしかなかった)。これが今日の慈恵医大図書館の前身である。この慈恵医院へ引越した理由についてはよく分らない、今後の研究課題であろう。

ここではこの文庫設立に貢献した委員(7人)の人選について簡単に触れておく。成医会文庫は一民間図書館ではあったが、その規模も大きく、公的性格もあり、また東大(医学部)図書館との併存する関係もあり、政府、東京府に対する許認可の問題は面倒であったと思われる。その点、設立委員に内務省衛生局長(現在の厚生大臣に相当)・元東京医学校校長(後の東大医学部長に相当)であった長与専斎や、宮内省侍医局長・元東大医学部長であった池田謙斎や、さらに当時の東大医学部長であった三宅 秀らがいたことは、この問題解決のために大いに力があつたものと思われる。また洋書購入にあたっては、それぞれドイツ留学者の池田、フランス留学者の三宅、英国留学者の兼寛が揃っていたことは何かにつけて便利であつただろうと思われる。さらに英文論文を掲載した成医会月報(Transaction)を西欧諸国の諸雑誌と交換するにあたっては、成医会の名誉会員であり、副会長などもつとめた Hepburn や Whitney, Eldridge らがしっかりと分担してくれたものと考えられる。

長与専斎小伝 長与専斎と高木兼寛との関係は、長与が1883年に主唱、設立した大日本私立衛生会で一緒に役員をつとめて以来の仲である(この衛生会は公衆衛生の思想を広く普及させるためにつくられた)。長与と兼寛との親交は長与が亡くなる1902年で終わるが、長与家と高木家との交際は、その後も長与の三男・長与又郎(病理学者、東大総長)と兼寛の次男・高木兼二(慈恵医専教授)、娘婿・樋口繁次(慈恵医専教授)、孫・樋口一成(慈恵医科大学長)、高木文



写真2. 長与専斎 (1838-1902).

一(慈恵医大教授)らとの間で長く続けられた。

(以下簡単に履歴書風に述べる)長与専斎は1838年8月大村藩の医官の家に生まれた。1854年、緒方洪庵の適塾に入門し、4年後、親友・福沢諭吉の後をうけて塾頭になる。次いで蘭医Pompeに師事、さらに本木昌造に英語を学ぶ(1861)。1868年(明治元年)、長崎精得館(病院)頭取、これが長崎医学校になるとその学頭(校長)となる。1871年、岩倉使節団に加わり、欧米の医学教育、衛生制度を視察、翌々年深い感銘をうけて帰国、さっそく文部省

に衛生局を設けてその長となる(衛生局が内務省に移管されるとまたその長となる)。1874年、東京医学校校長を兼務。同校が東大医学部に改称されると、適塾の後輩・池田謙斎を総理(医学部長)にし、自らは公衆衛生に専念するため総理心得となる。1883年、衛生思想普及のため大日本私立衛生会を結成、適塾の先輩・佐野常民を会頭に、自らは副会頭となる(1901年に会頭)。1902年9月、65歳で没。五男三女の子宝にも恵まれ、上記の三男・長与又郎のほか、長男・称吉は日本最初の胃腸病院の院長、五男・長与善郎は白樺派作家として著名。

## 成医会講習所

1881年(明治14年)3月の成医会例会において会長・高木兼寛は講習所を設けて医学生教育を行うことを提案し可決された。つまりこれが成医会講習所であり、今日の慈恵医大の始まりである。同講習所の実際の教育は同年5月から、借りていた東京医学会社(京橋区鎗屋町)の大広間で始められた。

しばらく講習所開設当時の日本の医学教育の状況を概観しておきたい。すでに述べたように当時は医師(洋医)の絶対数が少なく、しかも政府にはまだ医学校をつくり医師を養成する力はなかった。富国強兵で手が一杯で、とて

も医学教育どころではなかったのである。政府は多くの官立医学校を建てる代わりに、官立の東京医学校（東大医学部）を一つだけつくり、あとは私立、公立（県立、市立、町立、村立）の医学校に任せるという方法をとった。東大医学部では以後毎年20名ほどの卒業生を出すことになったが、この程度の数ではとても当時の医師不足を補えるはずはなかったのである。

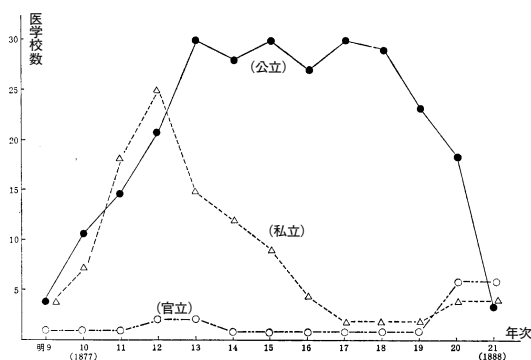


図1. 明治初期、医学校数の推移 (1876-1888)。

こうして病苦に悩む庶民のための医師の教育は、私立医学校、公立医学校に任されることになった。そして図1に示すように私立、公立の医学校は年々増加の一途をたどり、1875年3校、'76年8校、'77年18校、'78年32校、'79年46校と年々倍増していった。これら私立、公立医学校には東大医学部から締め出された数多くの医学書生が入学することになった。ただ政府は、これら医学校による医師の粗製乱造を恐れたために、1876年(明治9年)に医師開業試験なるものを設け、これに合格した者のみを医師として認定することにした。

慶応義塾医学所、済生学舎、成医会講習所はこのような背景でつくられた有名私立医学校であった。設立はそれぞれ1873年(明治6年)、'76年、'81年であった。

### 成医会講習所の校風

成医会講習所の設立の目的には、上述の実際的な医師を養成するということのほかに、成医会討論会「医風改良案」で強調された医学教育、つまり“高尚な医師”を養成するというより重要なことがあった。「医風改良案」の関連

部分を再度引用すると、「医学教育ヲ盛ニスル目的ノーツハ、(医療)業務上ノ悪風ヲ防グタメニアル。診察・治療ノ周到、衛生ノ注意、進取ノ気性ナドハ医学教育ノナイモノニハデキナイコトデアル。ココニ云ウ医学ノ教育トハ、イウマデモナク医学校や病院ニオケル知識ノミニ偏ツタ狭イ教育デハナク、広い教養ヲ身ニツケ、思想ヲ常ニ高尚ノ域ニ到達サセルモノ」ということであつた。

兼寛校長も实际的知識教育のみならず品性ある人間性の育成を一層重視した。とくに学生に浸透させたいものに宗教の世界があつた。彼は学生に自分の留学中の体験をこのように話している。「英国における宗教を基礎とせる医療施設に接して、成る程これではなければならない、という気持ちが起こってきた。こういう気持ちをもったがために、そのご慈恵医院、看護学校、医学校を建てるときに、この宗教によって貧しい病人を救済せんと欲した……。このような宗教の念の下に建てられた医学校は、この学校のほかに何処にもありません」と。そして彼は、“品性ある医師”“高尚な医師”になるためには学生時代から宗教の世界を知る必要があるとして、宗教色の濃い[明德会]なる講座を設けてきびしく聴講させた(この会はながく昭和時代まで続けられた)。

### 海軍軍医団の協力

松山棟庵は成医会講習所設立の有力な推進者であつたが、彼はそれまでもいくつかの学校や病院を設立、経営した経験をもっていた。1870年には郷里和歌山に英語学校共立学舎を、1871年には早矢仕有的(丸善の創設者)、米医 Simmons らと横浜に共立病院(後の十全病院)を、1873年には福沢諭吉と協力して慶応義塾医学所を、1878年には杉田玄端、隈川宗悦、米医 Simmons らと有楽町に東京共立病院を設立していた(彼はどうも共立という言葉が好きであつたらしい)。とくに慶応義塾医学所の場合にはこれが医学校であり、しかも成医会結成直前に経済的破綻によって廃校になっていたため、この経験は講習所の設立、経営、収支のために大いに役立った。経済的破綻の原因の一つは、教員に給料が支払えず、教員に成り手がなくなったためであつた。

ところで成医会講習所の教員にはほとんど給料が支払われなかった。それは同講習所の教員のほとんどが海軍軍医（成医会会員）であり、彼らはすでに給料（官費）をもらっていたからである（つまりそれ以上同講習所から支払う必要がなかったのである）。この海軍軍医を講習所の教師に願うというアイデアは、おそらくそれまで学校経営でさんざん苦勞した松山から出たものであろう。

ここに成医会講習所の開設当時（1881-1887）の教育科目と担当教員名を挙げる。（物理学，化学）木村壮介，高橋秀松。（動物学）鈴木孝之助。（薬物学）寺島大浩，鈴木孝之助，鈴木重道，菅原思朗。（解剖学）鈴木重道，木村壮介，鳥原重義，青木忠橘，鶴田鹿吉，高木兼寛。（生理学）松山誠二，鶴田鹿吉，島田完吾，鈴木重道。（内科学）鈴木孝之助，豊住秀堅，三瀦謙三，石黒宇宙治，佐々木文蔚。（外科学）木村壮介，加賀美光賢，河村豊州，吉田貞準，実吉安純。（産婦人科学）池田泰治，山本景行，実吉安純，芳村 晋。（断訟医学）山本景行。（衛生学）山本景行。（臨床講義）高木兼寛。

これら教員のうち、海軍軍医でないのは松山誠二と三瀦謙三の二人だけである。海軍軍医の貢献がいかに大きかったかが分かるのである。

兼寛は1882年から海軍医務局学舎（海軍軍医学校）の校長となり、海軍軍医生徒の教育にも携わることになった。彼はこの時から、講習所をこの軍医学校（芝山内天神谷）のなかに引っ越しさせ、講習所の学生を軍医学校の生徒と同じ教室、同じ教員（軍医官）で教育することにした。制服を着た軍医学校生徒は教室の前方を占め、勝手な服装をした（数においてはるかに多い）講習所の学生は後方の席で聴講していたという。つまり教室施設も教員もすべて軍医学校の一方的な好意によって教育をうけたのである。しかもこのような関係をその後（1891年まで）まる8年も続けたのであった（写真3参照）。

ことの当否善悪は別にして、私立、公立の医学校が経済的破綻のために次々と廃校になっていくなかで（図1参照）、成医会講習所だけが生き残り続けることができたのは、実にこのような（官立）海軍軍医学校のボランティア的な援助、協力があつたからこそであった。

このような状況は公私混同もはなはだしいとして、多くの人々から批判さ



写真 3. 成医会講習所と海軍軍医学校の共生時代の記念写真  
制服を着た軍医学校の生徒と和服姿の成医会講習所の生徒が仲よく記念写真に納まっている。

れたが、しかし批判する側にしても、兼寛の意図が病者のための良医を育てたいというただそれだけであることを知っていたから、組織だった声にはならなかった。また教育に参加した軍医たちにしても、このことに賭ける兼寛の熱意と精力に引きつけられて、自然にこのボランティア（有志共立）活動に巻き込まれていったのであろう。

1897年（明治30年）の時点になっても、教育施設の方はようやく軍医学校から独立したものの、教員の方はまだ三分の一は海軍軍医に依存していた。

### 伝統になった英語教育

兼寛校長が英国医学の称揚者であり、また教員のほとんどが、かつて海軍軍医学校で英医 Anderson に教育をうけた軍医であったため、成医会講習所の教科外国語はとうぜん英語に決まっていた。兼寛は、教科外国語を英語にする理由を、文部省に「ドイツ語は国内用の医師をつくるには適するが、国

外用の医師をつくるには適さない。……国際語である英語を学び、これによって知識を海外に求め、他方これによってわが医学の恩恵を全人類に浴させることこそ肝要である」と説明している。

慶応義塾医学所が廃校になったとき教員の大半は成医会に入会したが、同医学所はもともと福沢諭吉と松山棟庵が「東大医学部がドイツ語で教育するのなら、こっちは英語でやる」といってつくった医学校であっただけに、教員はすべて英国医学派であった。このことも成医会講習所の英語教育をさらに強くさせた（成医会の第三例会がすべて英語で進められたことはすでに述べた）。

明治以来、ドイツ医学が全国を支配するなかで、わが慈恵医大のみが講習所以来常に英国（流）医学を根づかせてきた伝統は高く評価されるべきであろう。

有志共立東京病院はのちに東京慈恵医院になり（1887）、皇后を総裁に迎えるが（後述）、そのとき成医会講習所は同医院の附属医学校というかたちになった。1903年には専門学校に昇格したので、その名も東京慈恵医院医学専門学校と改称し、さらに病院が東京慈恵会医院に改組されると、学校も東京慈恵会医院医学専門学校（Tokyo Charity Hospital Medical College）に改称された。

松山棟庵小伝 筆者は慈恵医大の主骨格は高木兼寛とこの松山棟庵によって出来上がったと思っているが、「有志共立」という思想についても、松山の影響は非常に大きかったように思われる。彼が関与した、英語学校共立学舎、横浜共立病院、東京共立病院、有志共立東京病院などすべて共立という名前が付けられている。

松山の性格であろうが、学校や病院の創立に一旦取り組むと、狂人の様に突進するが、完成して一段落す



写真4. 松山棟庵（1839-1918）。

ると惜し気もなくつぎの仕事に向かうという風であった（慈恵で兼寛ほど著名でないのはその所為もある）。兼寛の持続力、松山の瞬発力といったところかも知れない。

松山と親交のあった米人医師は非常に多かったが、兼寛に彼らを紹介したのもこの松山だったのではないだろうか。Hepburn, Whitney, Eldridge, Simmons らみなそうである。

（以下簡単に履歴書風に紹介する）松山棟庵は1839年（天保10年）、紀州（和歌山）那賀郡荒川庄の医を業とする家に生まれた。15歳で京都に上り、新宮涼民に蘭学を学んだ。1866年、横浜に出て米医 Hepburn について医学を研修し、また同年福沢諭吉の門に入り英語を学ぶ。1870年、郷里紀州に英語学校共立学舎を開き、英人 Sandals をやとう。1872年、早矢仕有的（医師、丸善書店の創始者）、米医 Simmons と協力して横浜に共立病院（後の十全病院）を開く。1873年、福沢諭吉と協力して慶応義塾医学所を開校し、校長となる。1875年、松本良順、佐藤尚中らと医学会社（わが国の医学会・医師会の先駆）を創立し、また同年尊生舎（後の松山病院）を開院する。1878年、隈川宗悦、米医 Simmons、杉田玄端、新宮涼園らと協力して有楽町に東京共立病院を興す。翌1879年、慶応義塾医学所を閉鎖。1881年、高木兼寛と成医会を興し、成医会月報を出す（編集長）。同年成医会講習所、有志共立東京病院を設立。1884年、松山邸において大日本私立衛生会を結成。1918年12月12日、長逝。

棟庵のみならず松山家と慈恵とは縁が深く、棟庵の子息のうち慈恵を卒業した者二人、慈恵の教授になった者二人（内科の松山陽太郎、外科の松山陸郎）、孫で慈恵を卒業した人も何人かいる。また成医会会員として活躍した松山誠二、新宮涼園は棟庵の甥である。

## 有志共立東京病院

有志共立東京病院は、先に述べたように有志者が資金を出し合ってつくった施療（慈善）病院であった。英語名は Tokyo Charity Hospital である。

高木兼寛が留学を終えて帰国した当時の日本はまだ貧しく、一旦病気になったら医者にはかかれず、死ぬしかない病人が溢れていた。そしてこの貧しい病人を救う方法は、彼らを無料で診療する施療病院をつくることであっ

た。兼寛ら有志者がつくった病院の設立趣意書には次のような文言がみえる。「人に幸不幸あり、時に遇不遇あり、これ天のしからしむるところ、貧にして病み、病んで療する能わざるものを救うは、健康富裕の人、社会に尽くすの義務たるを信ずるなり」「富めるものは善意の徳を積み、貧しい者はその恩恵を受けて天寿を全うできれば、有志者の喜びこれに勝ぐるものはない」。

兼寛が実際にこの病院の建設に着手したのはもちろん帰国してからであるが、その下地はすでにそれ以前からできていたようであった。彼が鹿児島医学校で師事していた Willis もまた施療病院の必要性を盛んに説いていたからである。県当局に提出した Willis の覚え書には、「真に開花した国では、富裕な者は貧者を助けるものである。これは天の摂理である。……鹿児島の富める者、理解ある者は、無料でかかれる病院をつくるべきではないか。精神の高潔さと資産に応じて寄付されんことを切に願うものである」とある。

施療病院設立について兼寛がさらに関心を深めたのは英国留学中であった。当時の在英日本公使館主補であった長崎省吾（後に東京慈恵会理事）はそのことを次のように回想している。「有志共立東京病院の創立に関することを少しばかり申し上げます。それに就きましては高木兼寛男爵が海軍留学生として明治8年6月英京ロンドンに参られ、セント・トーマス病院医学校に於いて医学を研究せられる傍ら、余暇を以ちまして、施療病院の施設の研究の希望がございました。当時在英日本公使館に長崎は主補として在勤して居りましたので一緒にあちこちを歩き、向こうの主たる人物、外交官等に接して色々と研究の材料を与えまして高木男爵も希望を達せられることができました。種々の社交場にも出られて随分いろいろな人と交際せられている中に段々施療病院というものが社会政策上どうしても必要であり且つそれが日本に於いても急務であると思われるようになりました。……高木男爵が社交場に出られてひどく感ぜられたことは失業者を作らない、失業者をふやさない、貧しい夫婦などで一人が病気になるとその介抱や医薬などの為め仕事が出来ない、これはどうしても施療病院へ収納しなければならないと感ぜられて日本にも是非施療病院を作りたいと考えられたのであります」と。

これをみると兼寛は、施療病院設立について宗教的思想的基盤（先述）のみ

ならず、かなり具体的な設立の方策まで学んできたように思われる。おそらく施療病院（Charity Hospital）と財閥、政治家、華族、皇族とのあるべき関係までも学んできたものと想像される。

### 施療病院創設有志会

高木兼寛、松山棟庵、隈川宗悦ら成医会会員は、1881年（明治14年）2月以来、施療病院の設立を呼びかけ（趣意書を配布し）、この呼びかけに賛同する有志35名を集めることができた。戸塚文海（海軍医務局長）、高木兼寛、松山棟庵、隈川宗悦、田代基徳、新宮涼園、安藤正胤、豊住秀堅ら成医会会員の外、ジャーナリストの子安 峻（読売新聞初代社長）、成島柳北（朝野新聞を発刊、主筆）、加藤九郎（読売新聞社で子安とともに活躍）ら、さらに実業家の早矢仕有的（丸善社長。医業のかたわら洋書、医療機械の販売）、安田善次郎（慈善家、大実業家）らなど多士済々であった。これら有志はしばしば協議し、病院名をその成立由来から有志共立東京病院にすること、また、高木兼寛、松山棟庵、隈川宗悦、田代基徳、子安 峻、成島柳北、加藤九郎、小松崎茂助の8名を創立委員にすることを決議した。

創立委員会は病院設立にあたって、資金はもちろん有志者からの拠金によることにし、しかもそれに永続性をもたせるよう工夫した。拠金は満5年をもって一期ときめ、第一種（千円以上の現金を出すに及ばずただその利子年一割に当たる金額を毎年或は毎半年に拠出するもの）、第二種（五十円以上千円以下も亦現金を出さずただその利子年一割二分に当たる金額を拠出するもの）、第三種（百円以上幾万円に拘わらずその現金を拠出する時は之れを本院に預かり置きただ利子のみ使用し満期の後元金の返済を受けるもの）の3種に分ち、また金銭のみならず物品の寄贈をも募ることにした（また拠金者の種別により施療患者の紹介証の枚数に差をつけて配布することにした）。これら拠出者は社中と称し、社中の中から正副病院長各一名、幹事若干名、医員若干名及び議員24名を選挙し、任期は一年、無報酬とすることなどが決められた。戸塚、兼寛、松山、隈川らは率先して各自金1,000円を拠出し、その他の有志からも申し出があり、予約金高は瞬く間に21,500円に達した（巡査、小学校教員の初任給が5円の頃であ

る)。

1882年7月、創立委員会は、院長・戸塚文海、副院長・高木兼寛を選出し、医員に松山棟庵、隈川宗悦、松岡勇紀(以上内科)、高木兼寛、河村豊洲、島田脩海、加賀美光賢(以上外科。診療科は内科と外科のみ)らを委嘱した。また同病院を成医会講習所並びに海軍軍医学校の臨床実習の場にすること、そして当直医は自費(無報酬)の者から募ることを決めた。

越えて1883年1月、広く華族、上級官吏、紳士に向かって、病院規則費と社中人名簿をそえて義金募集の檄を発送した。幸いこれが大きな反響となって拠金総額3,860円が集まり、さらに寝台、椅子などの現物寄付が寄せられた。また宮内省からは6,000円の御下賜金をたまわった。

有志共立東京病院の実際の診療は、すでに芝山内天光院(寺)を借りて1882年8月から開始されていたが、翌1883年9月からは旧東京府立病院(芝愛宕町)に引っ越し、そこで続けられることになった。

1884年4月、有栖川宮威仁親王が本病院の総長に就任されたのを機に、ここに正式の開院式が挙行された(当時、有栖川宮家は宮家のなかで最も声望が高く、また威仁親王は大正天皇が誕生されるまでは皇太子に擬せられていた)。このとき贈られた多くの式辞のなかで内務省衛生局長の長与専斎のそれはとくに優れたものであった。日本医界の先覚者らしく、わが国の医療事業の沿革から説きおこし、貧窮者に対する救療の必要なことを述べ、本病院の設立に着眼した人たちの先見の明を絶賛激賞した。なかでも病院と医学教育の連携を説いた部分は注目すべきものであった。「西洋各国ノ charity ハ夥シキ貧民患者ヲ施療スルガ故ニ、医学学校ト連帶シ、教師ナルモノソノ生徒ヲ同道、来院シ、患者ニツキータ病理治療ヲ説明ス。……ソノ事疾病ニ関シ豪モ害スルコトナキノミナラズ、教師ハ反復丁寧ニ医学ノ原理ニモトズキテ説明スルガタメニ、検査セザルモ可ナル事ニ至ルマデ十二分ニ検査シ、慎重ニ慎重ヲ重ネルタメ余蘊アルコトナシ。故ニ慈善病院患者ノ治療成績ハ常ニ自宅治療ノ者ヨリ著シキヲ常トス。本院ノ如キモ年所ヲ経過シ、統計ノ整理スルニ至ラバ必ずソノ良キ成績ハ自宅治療ニ超絶スルヲ見ル事決シテ疑ウベカラズ」。

慈善病院(施療病院)は医学生の実習病院として好ましいばかりでなく、ま

た患者にとっても自宅で治療するよりも成績ははるかに良い筈であると云うのである。これは本病院と成医会講習所との好ましい関係を見通した発言であろう（長与は近い将来同講習所が英国流の病院附属医学校に発展することを予想していたようである）。

有志共立東京病院は5年間を一期として有志の拠金によって発足したわけであるが、この5年間における名流夫人たち（婦人慈善会）の協力、援助も忘れてはならない。婦人慈善会というのは、鹿鳴館を舞台とする名流夫人の（有栖川宮熾仁親王妃董子殿下を総裁とする）団体で、この病院に対する経済的援助を行う組織であった。

婦人慈善会が手始めに行った行事は鹿鳴館での慈善バザーであった（1884）。図2はこの鹿鳴館貴婦人慈善会図なる錦絵であるが、図中には活躍した夫人名が書かれており、それによると総長・有栖川宮熾仁親王妃董子殿下、副総長・有栖川宮威仁親王妃慰子殿下、会頭・大山 巖（伯爵）夫人捨松、副会頭・伊藤博文（伯爵）夫人梅子、同・井上 馨（伯爵）夫人武子、委員・西郷従道（伯爵）夫人清子、同・松方正義（伯爵）夫人満左子らのそうたるメンバーであった。

このバザーでえられた売上高は優に7,000円を越え、好評であったので翌

年もまた鹿鳴館で開催された。この時は皇后、皇太后が行啓になり、この病院の施療に深い関心を示された。この両度にわたるバザーで得られた計15,000円の収益金はそっくり病院の事業費に寄付された。病院では早速これを看護婦教育所の建築費に充当した（有志共



図2. 鹿鳴館での慈善バザー（1884）。

立東京病院看護婦教育所、現・慈恵看護専門学校の前身である)。

婦人慈善会 この会が有志共立東京病院の維持、発展のために貢献したことはすでにのべたが、会そのものは次のような経緯で誕生した。

有志共立東京病院は5年を一期として、有志の拠金によって出発したのであるが、その次の時期を如何に維持、発展させるか、その基礎づくりを如何にするか、といった問題は有志者の共通の心配事であった。兼寛は脚氣の研究いらい親交のあった伊藤博文伯爵にこのことを相談したところ、伊藤は、いま鹿鳴館を舞台に（彼の夫人を先頭に）活躍している華族夫人を中心にして施療病院の後援組織をつくってはどうかと答えた。こうして婦人慈善会は伊藤梅子を中心に誕生した。

婦人慈善会是有栖川宮熾仁親王妃董子殿下を総長に戴き、1884年5月に発会式を挙行了た。会員には伯爵夫人伊藤梅子、伯爵夫人大山捨松、伯爵夫人井上武子、伯爵夫人山県友子、候爵夫人鍋島栄子、伯爵夫人松方満左子、公爵夫人毛利安子らの名流夫人が顔を揃えていた。そして多い時には総員350人にもなった。

この会の有志共立東京病院に対する後援は、鹿鳴館での慈善バザー（図2）で看護婦教育所をつくったり、病院を東京慈恵医院に改組し、皇后総裁の御下賜金で運営できるようにしたり、その有志共立的な働きは絶大であった（このことは本文に述べた）。

## 東京慈恵医院へ改組

婦人慈善会の協力、援助にもかかわらず、（兼寛の考えでは）病院の基礎をさらに固めるにはなお10万円の資金を必要とした。そこで1886年6月、戸塚文海院長は、長与専斎、池田謙斎、伊東方成、高木兼寛、橋本綱常、石黒忠恵、長谷川泰、岩佐 純、実吉安純、佐藤 進、緒方維準、大沢謙二ら（わが国医界の最高実力者たち）13名の連盟で井上 馨伯爵を介して婦人慈善会に意見書を送り、西欧の慈善病院の例にならって皇室のご援助の下に拡張経営したい旨の上奏を請願した。

これを受けて婦人慈善会は伊藤博文夫人梅子ほか 29 名の連署の上奏書を皇后に奉った。長文のため引用は差し控えるが、文中「西洋諸国では富める者が金を出し合って救済病院を建て、皇后または皇女、皇妃を総裁に迎えていると聞いております」という箇所は、兼寛が英国で学んだ慈善病院の在り方を示したものとして興味深い。

皇后はこの上奏書をご覧になり、総裁になることをご承諾になられた(1887)。婦人慈善会側ではこれを機に、病院名を東京慈恵医院と改め、同会会員はこれより東京慈恵医院会員として病院に協力することになった。東京慈恵医院規則第一条には「本院ハ皇后陛下ノ聖眷ヨリ設立スルモノ」で「皇后陛下ノ慈旨ヲ奉ジ貧窮疾病シテ医薬ヲ得ル力ナキ者ヲ施療スル」とあり、「皇室資金並ビニ有志者ノ寄贈拠金ヲ以テ維持スル」と明記されている。



写真 5. 東京慈恵会総裁・有栖川宮威仁親王妃懋子殿下(1864-1923)。

金沢藩主・前田慶寧の第四女。1880 年有栖川宮威仁親王御息女として御入興。東京慈恵医院の幹事長として、また東京慈恵会の総裁として御尽力あり、皇族の中で慈恵の発展のために最も力のあった妃殿下(本文参照のこと)。

こうして東京慈恵医院の役員、つまり幹事長、幹事、院長、次長、商議医員らは皇后の特選で任命されることになった。すなわち幹事長・有栖川宮熾仁親王妃董子殿下、幹事・鍋島直大(公爵)夫人栄子、山県有朋(伯爵)夫人友子ら 10 名、院長・高木兼寛、次長・実吉安純、商議医員・戸塚文海、伊東方成ら 11 名(上記夫人慈善会に意見書をだした 13 名から高木と実吉を除いた人たち)であった。

1887 年(明治 20 年) 5 月、東京慈恵医院の開会式は皇后のご臨席のもとに盛大に举行された。以後毎年、しかも多い年は春秋 2 回行啓されることになった(第二次大戦中の昭和 18 年 5 月の行啓までに計 50 回におよんだ)。1887 年 4 月には皇后より 20,000 円のご下賜があり、また皇太后、皇后より年々 600 円ずつのご下賜が

あることになった。また 1889 年からお手許金より毎月 100 円を下賜され、同年 2 月には新病棟増築のため皇后より 10,000 円のご下賜があり、同年 5 月にはさらに病院移転費としてお手許金より 8,446 円を下賜された。1899 年 3 月には宮内省より、ご下賜金年額 600 円のところ 1,400 円に増額され、施薬料としての年額 1,200 円を 1,800 円に増額されることになった。1907 年 2 月には皇太子妃より医院費用補助として向こう 5 か年 500 円ずつご下賜があり、また同年 5 月、皇后が当医院にお成りの折には、お手許金より 100,000 円を下賜された。一般寄付も相当あり（略）、その中には安田善次郎の場合のように 1 床 1 日 60 銭の費用の病床 30 床分を向こう 5 か年間支払うという形のものもあった（1906）。

1896 年、有栖川宮威仁親王妃慰子殿下は熾仁親王妃董子殿下に代って東京慈恵医院の新幹事長に就任された（写真 5）。

### 社団法人東京慈恵会の設立

1907 年（明治 40 年）に入り、日露戦争後の社会情勢に対応して、また東京慈恵医院の内部状況にかんがみて、当医院は一層の規模拡大と近代化を必要とするにいたった。皇族からは（上にみるように）頻繁にご下賜金があったにも拘らず、それだけでは病院の運営が無理になってきたのである。患者数をみても、10 年前（1897）の患者数（外来 270 人/日、入院 36 人/日）の 2 倍にも 3 倍にもなっていた。従来のもっぱら皇族のご下賜金に依存する経営から、もっと幅広い多くの実業家、華族の後援に依存する新しい組織が必要になってきたのである。

幹事長・有栖川宮威仁親王妃慰子殿下は当時の慈恵医院の困窮ぶりをこのように述べておられる（ご遺稿「おぼえがき」より）。

「社会諸般の事業漸次整備の緒に就くも、独り慈善の事は未だこれに伴わず、慈恵医院のごときも、設立以来既に二十年の星霜を経たれども、僅かに毎日 50 人内外の患者を入院するに過ぎず、それすら時には出来兼ねる状況なり。皇后陛下の厚き御眷護の下に置かせられるものとしては、如何にも規模狭小にして、慈善の趣旨よりいうも、また世の進歩の上より見るも本意なき

こと故、如何様にもして之れを拡張せんと希うこと切なり。……先日院長(高木兼寛)に案内を求め、親しく院内を巡見したりしに、その清潔なると治療上の事とは行き届き居る様思いたれど、建物は頗る不完全にして、見苦しき所も少なからず。……自分は一昨年洋行のとき、彼の地の慈善病院(Charity Hospital)を調査せしに、その規模の大きく、設備の完全なることを認め、慈恵医院を拡張するの必要を一層深く感じたり。……最早今日にては本医院の拡張をなすべき好機に達せりと思う」。

慈恵医院を改築、増築し、多数の患者を収容するには、もちろん多額の資金を要するが、もうこれ以上ご下賜金や会員の援助に頼るのは困難な事情にあった。慰子殿下は(これからは広く実業家や華族の力を借りるべきであると考え)まず渋沢栄一男爵に慈恵医院の相談役兼実業家団体募金委員長を仰せつけられた。渋沢はさっそく井上馨伯爵、松方正義伯爵に呼びかけ、拡張後の病院を社団法人にするべく協議した。

1907年5月20日の慈恵医院総会において、渋沢らは病院の組織を改め、新たに社団法人・東京慈恵会を発足させることを決議した。そして7月11日、徳川家達、鍋島直太、高木兼寛、渋沢栄一、大倉喜八郎、安田善次郎、森村市左衛門ら10名は、内務大臣、文部大臣に法人の設立を申請した(同月19日に許可された)。こうして東京慈恵会は、東京慈恵医院を東京慈恵会医院と改称してこれを運営し、さらにこれに同医学専門学校および同看護婦教育所を付属させることにした。もちろん東京慈恵会の事業目的が「貧困にして医業を得る資力なき病者の施療」にあることには変わりなかった。

1907年7月4日の皇后のご沙汰により、有栖川宮威仁親王妃慰子殿下が総裁に推挙されると(正確には19日に社団法人の設立が認可されると)、同総裁より次の役員、職員が任命された。会長・徳川家達公爵(徳川慶喜の大政奉還後、徳川家を継承し、藩籍奉還後は静岡藩知事)、副会長・渋沢栄一男爵、顧問・松方正義侯爵(財政通の大政治家。大蔵大臣、総理大臣を歴任)、井上馨侯爵(政治家。内相、農相、蔵相などを歴任)、桂太郎侯爵(陸軍元帥。陸軍大臣を歴任した後、数回桂内閣を組閣)、岩崎弥之助男爵(大財閥。日本銀行総裁)、三井八郎右衛門男爵(大富豪。三井家第十代当主)ら9名、理事・鍋島直太侯爵(もと

佐賀藩主、英国に留学)、大倉喜八郎(実業家、商事、鉱業、土木を中心に大倉財閥を確立)、森村市左衛門(実業家、対米貿易を中心に森村財閥を築く)、安田善次郎(実業家、多くの銀行を設立、金融業中心の安田財閥を築く)ら14名、評議員・伊藤博文公爵夫人梅子、大山 巖公爵夫人捨松、高木兼寛男爵夫人富子ら67名、職員としては医院長・高木兼寛男爵、医院次長・実吉安純子爵、商議医員・池田謙斎男爵、松山棟庵ら8名、医員・日高 昂、金杉英五郎、高木喜寛、樋口繁次、松山陽太郎ら9名である。

1907年7月より翌1908年3月までの寄付金払込人員226名、申し込み金額333,040円(これに繰越金を足すと資本金579,713円)、会員数もまた大いに増加し、同3月末現在で名誉会員6名、正会員884名に達した。これで病院は再び若返り、新しいエネルギーを獲得したのである(巡査、小学校教員の初任給が12円の頃である)。

渋沢栄一小伝 渋沢が高木兼寛と特に親しくなったのは1894年(明治27年)、兼寛が渋沢の癌を手術してからである。渋沢はこの1894年と1904年の二回、生死にかかわる大病をしたが、そのつど兼寛によって救われ、以来その報恩もあって、兼寛の事業を献身的に手伝った。1907年、慈恵医院を改組して社団法人・東京慈恵会をつくった際には、実業家団体の募金委員長を引受け、またその中心人物として活躍した(その前の宮崎神宮の大造営のときにもその監事として募金に協力し、幹事長・兼寛を助けた)。東京慈恵会には、結成時から亡くなる1931年まで24年間、副会長をつとめ、会の運営に献身した。東京慈恵会医学専門学校、同医科大学の卒業アルバムには必ず慈恵会副会長・渋沢栄一の大きな写真が掲載されていた。この医学校学生、教職員から衷心尊敬されていたことが分かるのである(アルバムの写

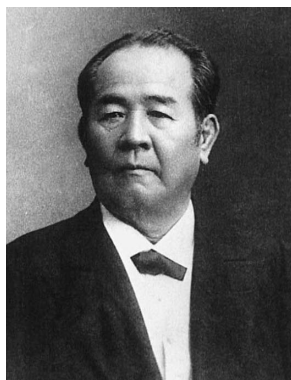


写真6. 渋沢栄一(1840-1931)。

真掲載は亡くなる 1931 年まで 20 数年間続けられた)。

(以下簡単に履歴書風にのべる) 彼は 1840 年(天保 11 年)、武蔵榛沢の郷土の子として生まれた。父から論語を学び、それを終生の指針とした。もともと一橋家につかえる幕臣であったが、1867 年(慶応 3 年) 徳川昭武に随行して渡欧、西欧の近代的産業設備や経済制度を学んだ。維新政府ができるや静岡に合本組織(株式会社の先駆) 商法会所を設立し、1869 年からは大蔵省に出仕し、租税、貨幣、鉄道、銀行などに互って諸制度の確立を担当した。1873 年に退官した後、第一国立銀行や王子製紙、大坂紡績、東京瓦斯、日本鉄道などを設立、経営した。また東京銀行集会所、東京手形交換所なども組織した。

兼寛と知り合った頃はすでに財界の世話役として重きをなしていたが、兼寛にたいしては常に先生と尊称して特別の敬意を表していた。そして兼寛の方は渋沢のおかげで大倉喜八郎その他多くの財界人と知り合うことができた。

1916 年(大正 5 年)、実業界を引退。1931 年(昭和 6 年) 没。子爵。

## あ と が き

この小論では慈恵医大の構成単位すなわち医学校、図書館、付属病院などの設立過程を述べた。そしてその何れもが共通して、志を同じくする者が力を合わせてつくったものであった。さしあたっての目的も、参加したグループもそれぞれ異なるが、その中心となる思想は同じ有志共立というものであった(その後各単位は不思議な力によって自己形成する有機体の如く、引き合い結合しながら一つの目的をもった有機体・慈恵医大に集束、生長していった。筆者はこの不思議な力に高木兼寛の非凡な計画性をみたいのであるが)。

この[あとがき]では、慈恵草創期にはたらいだこの有志共立思想のさらにその源流について考察してみたい。

成医会を中心に成医会講習所、成医会文庫、有志共立東京病院などをつくっていった最もアクティブな人々に（高木兼寛をのぞいて）、長与専斎、池田謙斎、戸塚文海、田代基徳、松山棟庵、隈川宗悦、新宮涼園、安藤正胤、松山誠二、上田藤太、杉田 武、加賀美光賢、河村豊洲、豊住秀賢、実吉安純、鈴木重道、木村壮介、鳥原重義、山本景行、青木忠橘、鶴田鹿吉らがいる。

ここに長与専斎から田代基徳までの4人は緒方洪庵の適塾の出身である。また次の松山棟庵から杉田武までの7人は福沢諭吉の慶応義塾で学んだ福沢一門である。福沢諭吉は適塾で学び、緒方洪庵に心酔して慶応義塾を開いたといわれるから、この7人もまた適塾一門と見てよいであろう。何れも英国医学派である。続く加賀美光賢から最後の鶴田鹿吉までの10人は英医 Willis ないし英医 Anderson に師事した海軍軍医たちである。

（余談であるが、幕末蘭学の二大潮流—大阪の適塾一門と佐倉の順天堂一門のうち前者のみが慈恵医大創立に関与し、後者はむしろ東大医学部創立に関与し、またそれぞれがわが国医学教育の英国型とドイツ型にきれいに別れたことは大変興味深い）。

さて有志共立という思想の源流についてである。（本小論では）松山棟庵のつくった学校、病院がすべて共立という名前がついていること、さらにその作り方がいずれも有志共立的であったことから、一つの源流は松山に由来するように考えたのであるが、さらにその水源を探っていくと案外彼の師匠、福沢諭吉あたりに辿り着くのかもしれない。もともと福沢の慶応義塾の建学の精神は「官学に対するに有志共立の慶応義塾をもってした」と云われるし、また福沢じしんも「慶応義塾之記」に、「わが党の士相互にはかつて、ひそかに彼の共立学校の制に倣い、一小区の学舎を設け、これを慶応義塾と名づく」と書いているからである。この「彼の共立学校」というのはもともと英国の Public School の意であり、国家公共のために公共団体によって設立、運営された私立学校のことであった。この福沢の思想からいえば成医会講習所も立派に「彼の共立学校」に類するものであろう。

適塾で福沢の後輩であった長与専斎は、有志共立東京病院の開院式で、医学校と病院の連帯について大変高邁な祝辞をのべた（そして成医会講習所の

行事にもしばしば出席していた)。それはもともと彼の思想の中に「官立の大学（基礎的研究所）と私立の病院（治療研究所）の競争」といった医界二元論的な思想があり、この病院（有志共立東京病院）と医学校（成医会講習所）が実際の治療の研究をおこない、官立の大学と競争したら面白いと夢想していたからではないだろうか。

成医会が進めた医学校、病院の設立の中核的思想は何といっても慈善思想、ないし救貧思想にあったことはくり返し述べたが、当時の随落した医療界の状況から考えて、成医会において「医風改良案」を提示した（福沢一門の）松山誠二の意見は高く評価されるべきであろう。そしてこの松山の倫理思想にしても、さらにその源流をさかのぼると、あんがい福沢諭吉をこえて緒方洪庵あたりに辿り着くのかも知れない。緒方もまた医師の自戒の文で次のように述べており、松山の意見に酷似しているからである。

- 「1. 医の世に生活するは人の為のみ、おのれがためにあらずといふことを其業の本旨とす。安逸を思はず、名利を顧みず、唯おのれをすてて人を救はんことを希うべし。……
2. 病者に対しては唯病者を視るべし。貴賤貧富を顧みることなかれ。……
3. 病者の費用少なからんことを思うべし。命を与ふとも、其命を繋ぐの資を奪はば、亦何の益かあらん。……
4. 同業の人に対しては之を敬し、これを愛すべし。たといしかること能わざるも、勉めて忍ばんことを要すべし。……」。

慈恵の特徴である英語教育についても少し触れるべきであろう。本小論では、その起源は英医の教育をうけた海軍軍医と、慶応義塾で英語教育をうけた福沢一門であろうと述べたが、後者についてはこれもひょっとすると一部は緒方洪庵あたりからきているのかもしれない。緒方もオランダ語による学問の限界を感じ、早くから英語の重要性を認識して、ある蘭方医にこのような手紙を書いているからである。「当時世に開くべきは英学に候処、可然人才無之、兎角遅滞之姿に在之候」。

この「あとがき」では雑多なことを取り留めもなく書いたが、とにかく慈恵創立の思想を考えてみると、案外、適塾の緒方洪庵あたりから来ているも

のが少なくないように思われたのである。

#### 主要参考図書

1. 藤野恒三郎. 日本近代医学の歩み. 講談社, 1974.
2. 神谷昭典. 日本近代医学の定立. 医療図書出版, 1984.
3. 慶応義塾 編. 慶応義塾百年史(上). 慶応義塾, 1965.
4. 編集委員会. 東京慈恵会医科大学八十五年史. 東京慈恵会医科大学, 1965, 東京慈恵会医科大学百年史・東京慈恵会医科大学, 1980.
5. 長尾折三. 医弊. 当世医者気質. 春秋社, 1980.
6. 飯田 鼎. 福沢諭吉. 中央公論, 1984.
7. 松田 誠. 高木兼寛伝. 講談社, 1990.
8. 鈴木要吾. 松山棟庵先生伝. 松山病院, 1943.
9. 伴 忠康. 適塾と長与専斎. 創元社, 1987, 適塾をめぐる人々. 創元社, 1988.
10. 成医会 編. 成医会月報. 1号-82号. 成医会, 1881-'87.
11. 東京慈恵医院 編. 東京慈恵医院報告. 第一号. 東京慈恵医院, 1888.
12. 東京慈恵会 編. 東京慈恵会総裁威仁親王妃慰子殿下御事蹟. 東京慈恵会, 1926.